

昼飯大塚古墳

第7次調査

範囲確認調査概要 平成11年度



2000

大垣市教育委員会

序文 昼飯大塚古墳の発掘調査は昭和55年度に始まりましたが、平成6年度からは史跡指定と整備を念頭に、保存を目的とした範囲確認調査を毎年度実施してまいりました。その結果、この古墳は4世紀後半に築かれた東海地方でも最大級の前方後円墳とわかり、具体的な埴輪の配列や葬送儀礼などに使われた遺物についても明らかにすることができました。

こうした調査結果から、このたび国から、国内的にも価値が高く重要な古墳として国史跡に指定されました。本市にとりましては、史跡としては大正10年に美濃国分寺跡が指定されて以来のことであり、貴重な史跡を保護・活用していく責任を感じているところでもあります。これまでに用地の取得や発掘調査にご理解とご協力を賜りました地元の関係者の皆さまや自治会、そして調査や整備についてご指導をいただきました文化庁および岐阜県教育委員会、調査整備委員会の先生方に厚くお礼を申し上げます。

平成12年8月

大垣市教育委員会
教育長 子安一徳

- 例言**
1. 本書は平成11(1999)年度に実施した昼飯大塚古墳の環境整備事業に関する報告書である。ただし、後円部頂については平成10(1998)年度事業の成果も含んでいる。
 2. 事業に伴う発掘調査は、国庫補助事業市内遺跡として国・県から補助を受けて、大垣市教育委員会がおこなった。調査は平成11年度で7次を数える。
 3. 調査は中井正幸(大垣市教育委員会文化振興課)が担当した。
 4. 調査は平成11年8月2日から11月15日まで実施した。
 5. 磁気探査は、亀井宏行氏(東京工業大学)と桜小路電機有限会社のご協力を得て実施した。
 6. 葺石の分析は、橋本清一氏(京都府立山城郷土資料館)のご協力を得て実施した。なお、葺石の記録は、前年度までと同様にデジタル化して保存と活用に備えた。
 7. 竪穴式石室内部の写真撮影は、寿福滋氏のご協力を得て実施した。そのほかの写真は主として中井が担当した。
 8. 鉄製品の取り上げは塚本敏夫氏(財団法人元興寺文化財研究所)のご協力を得て実施した。
 9. 本書の執筆は、中井・東方仁史・中條英樹・岩本崇・阪口英毅・林正憲・魚津知克・遠山昭登・中川敬太・橋本英将・大野壽子・北口聡人(執筆順)がおこなった。編集は、中井の指示のもと阪口(京都大学埋蔵文化財研究センター)が担当した。分担は文末に記した。製図には高木清生の協力を得た。
 10. 本事業の体制と参加者は以下の通りである。

【昼飯大塚古墳調査整備委員会】

八賀晋 福永伸哉 小野健吉 岸本直文(オブザーバー) 川部誠(オブザーバー)

【現地調査指導】

近藤義郎 白石太一郎 高橋克壽 伊達宗泰 森下章司

【調査参加者】

魚津知克 大野壽子 北口聡人 阪口英毅 清水美智子 高木清生 高橋イトエ
中條英樹 遠山昭登 所佳子 中川敬太 中川つる 中村敏朗 中村美紀 橋本英将
林正憲 東方仁史 弘岡政夫 福田治子 星津さやか 本多博道 牧村玲子
宮崎雅充 森たか彥 山岸岳 山本恵子 吉村敬子 渡辺令子

目次	平成11(1999)年度の事業	1
	第7次調査の概要	2
	1. 後円部頂の調査 第6・7次	2
	(1) 埴輪列	
	(2) 墓 墳	
	(3) 盗掘坑	
	(4) 竪穴式石室	
	(5) 粘土槨	
	(6) 墓墳内西部の鉄製品群	
	2. 後円部墳丘の調査 第7次	4
	(1) 17トレンチ(拡張区)	
	(2) 13トレンチ	
	3. くびれ部の調査 第7次	6
	(1) 11トレンチ(拡張区)	
	(2) 18トレンチ(拡張区)	
	4. 出土遺物	8
	(1) 埴 輪	
	(2) 鉄製品	
	(3) 石製品・玉類	
	(4) 中世以降の土器	
	墳丘・周壕形態の復元	11
	第7次調査までの総括	



現地説明会風景(13トレンチ)

表紙：竪穴式石室内部(西から)[撮影 寿福滋] 裏表紙：鉄製品出土状況(東から)

平成 11(1999) 年度の事業

事業地の維持管理 事業地は従来どおり市土地開発公社の所有地であったが、今後の環境整備を控え調査整備委員会の指導のもと北側のスギなどを伐採した。クスノキなどの高木は、平成 12 年度以降、順次公園へ移植することとなった。また、都市施設課の協力を得て北東側のクスノキに突っ張りを施した。

発掘調査 8 月 2 日から 11 月 15 日まで第 7 次として実施し(図 1) 範囲確認としては最終調査と位置づけた。墳丘部分では新たにトレンチを設定せず既設のトレンチを部分的に拡張するにとどめ、埴輪の取り上げを主な目的とした。くびれ部の 11 トレンチ(4 次)と 18 トレンチ(6 次) 後円部へのスロープに設定した 17 トレンチ(6 次) がこれにあたる。調査を保留していた 13 トレンチ(5 次) は完掘をはかった。後円部頂では一旦埋め戻していた埴輪列について、掘り方を確認し、取り上げた。また、墓壇範囲の再確認および竪穴式石室に付随する副室の存否の確認を目的とする南北第 2 サブトレンチを設定した。なお、調査開始前の 7 月にはこれまでに出土した埴輪、調査終了後には鉄製品と玉類の整理事業をおこなった。

調査整備委員会 9 月 1 日に第 8 回となる委員会を開催し、現地視察の後、今後の事業計画について調整をはかった。国の史跡指定に関して、具体的な範囲と手続きについて文化庁からの指導があった。

調査の公開と普及啓発 9 月 18 日(土) に現地説明会を開催し、発掘調査の成果を公開した。(株) イビソクの協力を得て竪穴式石室内へ CCD カメラを入れ、地表のモニターで石室内の様子を立体視できるように工夫をした。また、石室内を 360 度再現できるように設定したパソコンをプレハブに 5 台設置し、多くの方々が石室内を観察できるように配慮した。夏休み子ども教室では、昨年度に引き続き体験発掘をおこない、現地での発掘作業と水洗い作業を通して古墳や遺物に触れられる機会を設けた。

調査概要の刊行 平成 10(1998) 年度に実施した第 6 次調査の成果のうち、墳丘の範囲確認に関わる部分を中心に『昼飯大塚古墳』として編集、10 月に刊行した。この編集は共同で調査にあたった大阪大学昼飯大塚古墳発掘調査団が担当した。今回は第 6 次調査のうち後円部頂に関わる成果と第 7 次調査の成果の概要を合わせて報告する。

事業の記録 昨年度に引き続き、大垣ケーブルテレビに委託して発掘調査と現地説明会の様子を映像として収録した。また、墓壇平面形や粘土槨の確認など新たな成果があった後円部頂については、再びバルーンを利用して空撮をおこなった。

史跡の指定 本古墳は平成 10 年 12 月に岐阜県史跡となっていたが、文化庁の指導により平成 11 年度中に国史跡指定への手続きを済ませることになったので、平成 12 年 2 月に安田早苗氏、安田誠氏、清水善彦氏、市土地開発公社の協力を得て文化庁へ関係書類を提出した。これを受けて市教育委員会では今後の事業計画を再検討し、平成 12 年度中の『基本計画』の策定を予定している。(中井)



図 1 調査位置 (S: 1/2000)

第7次調査の概要

1. 後円部頂の調査 第6・7次

(1) 埴輪列

第7次調査では、第5次調査で確認していた後円部頂外周埴輪列について、掘り方の精査と取り上げをおこなった。埴輪列を構成する円筒埴輪の底部、計56個体を原位置で確認した(図2・図12)。これらは直径約20mの円を描いて後円部頂を全周していた。復元すると150本程度の埴輪を樹立していたとみられる。埴輪列は溝状の掘り方を伴っているが、埴輪と埴輪の間の掘り方がくびれる形状を呈すること、1段深い掘り方をもつ埴輪があることからすると、埴輪ごとに坑を掘り、結果的に溝状になった可能性もある。掘り方の幅は検出面で40～60cmをはかる。深さは復元すると30cm以上あったと考えられ、底には数cmから数十cmの置き土を施していた。口縁の高さをそろえるためと考えられる。また、前方部頂へ続くスロープの埴輪列では、掘り方の底が外周埴輪列よりも1段深くなっており、続けて掘削されたのではないことを確認した。埋土に前後関係がみられないことから、埴輪の樹立はほぼ同時と考えられる。

埴輪列中の埴輪3個体の内部から、土師器を検出した。破損はしているが完形に近く、埴輪の底部とほぼ同じレベルで出土したことから、何らかの意図をもって入れられたものと考えられる。(東方)

(2) 墓 墳

第7次調査における墓墳の調査は、墳丘主軸に直交する南北第1サブトレンチから西へ4mの位置に新たに設定した南北第2サブトレンチにおいておこなった(図2)。墓墳の平面形や規模などは、すでに第5・6次調査でおおよそを確認していたが、今回さらに新たな知見を得ることができた。第6次調査の所見では、墓墳の平面形はほぼ正方形ながら南西隅がやや内側に入り込む不整形を呈するとしていたが、南北第2サブ

トレンチ東壁の土層観察および墳頂面の平面的精査の結果、南西側が約15m外側に広がることが判明し、南北約12m、東西約11mをはかる、ほぼ隅丸方形を呈する墓墳であることを確認した。

墓墳は、南北第1サブトレンチでは上部が緩やかな2段状になることを確認していたが、南北第2サブトレンチでは上部に段をもたないことが判明し、墓墳の一部においてのみ上部にテラス状の段が存在する可能性が高まった。(中條・岩本)

(3) 盗掘坑

埋葬施設まで達している盗掘坑を3箇所を確認した。いずれも竪穴式石室に対するもので、南側壁の東小

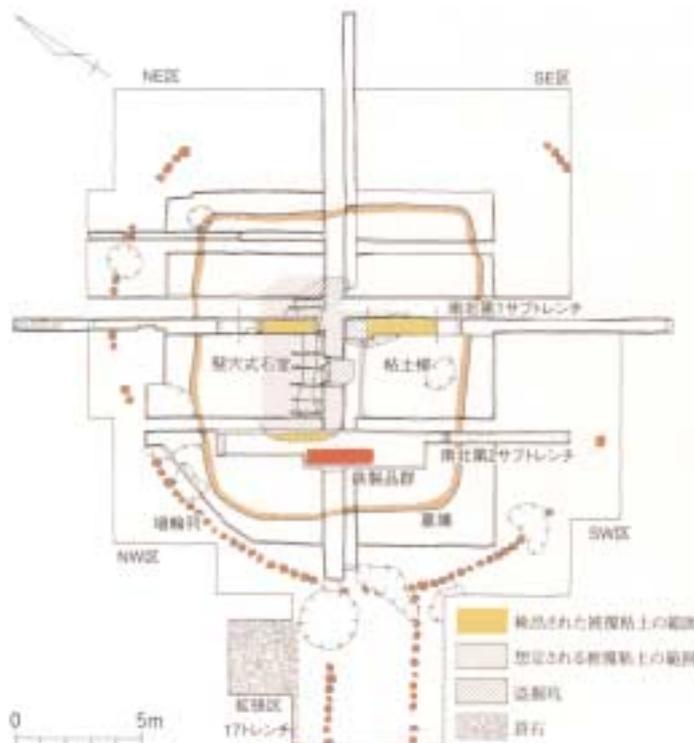


図2 後円部頂平面図 (S: 1/300)

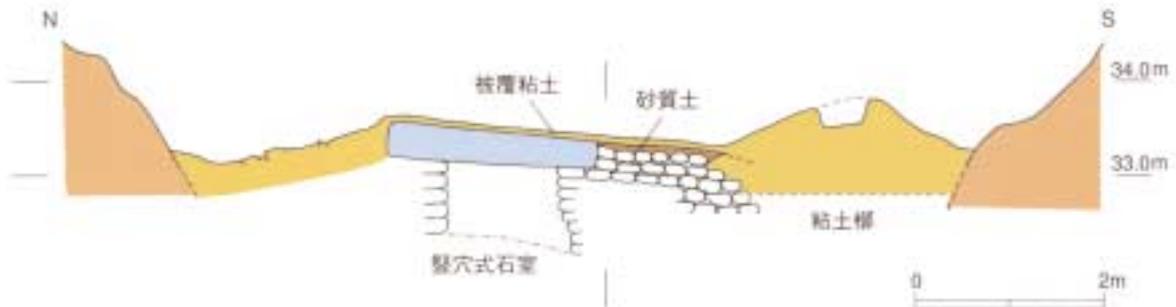


図3 墓墳・埋葬施設断面模式図(S:1/80,南北第1サブトレンチ東壁)

口よりと中央付近にそれぞれ1箇所、東小口に1箇所である(図2)。そのうち南側壁の中央付近のものは、盗掘時に取り外した石室構築石材を投棄することによって埋め戻していた。それらの石材を除去したところ、石室内部の空間へ達する侵入口が露出し、以後この侵入口を利用して石室の調査をおこなった。盗掘坑埋土からは玉類のほか、石製品や鉄製品の小片など、石室内におさまられていたと考えられる副葬品の一部が出土している。盗掘坑が掘削された時期は、3箇所とも特定できない。(阪口)

(4) 竪穴式石室

竪穴式石室は後円部頂の中央やや北よりに、墳丘主軸に平行して東西方向に構築されている。墓墳内でもやや北よりに位置し、南側には平行して粘土槨が存在する(図2)。内法で長さ約4.5m、東小口幅1.2m、西小口幅0.8mという暫定的な数値を、レーザーを使用した3次元計測によって得ている。石室内部に土砂が堆積しているため内法の高さは明確にできないが、現状の堆積土砂上面から天井石までの高さは80~90cm程度をはかる。石室全体として東側小口を高く構築しており、埋葬頭位は東の可能性が高い。

天井石は石室内部から観察できるもので8枚を数え、すべて砂岩製である。下面と側面にはほぼ全面に赤色顔料を塗布している。遺存状況のよい小口部分の壁体を見ると、様々な大きさや形態の割石を最上段までほぼ直立するように積み上げており、四隅は最上段まで明瞭に角を保つ(表紙)。これらの構築石材には砂岩製が圧倒的に多いが、チャート製も数点存在し、赤色顔料の付着しているものもある。

南北第2サブトレンチでは、現地表下約1.4mで被覆粘土上面の一部を確認した。被覆粘土の西端は確認していないが、南北第2サブトレンチ内におさまるものと推定している。また、物理探査のデータから副室が存在する可能性が指摘されていたが、その存否を確定するにはいたらなかった。(阪口・中條)

(5) 粘土槨

第6次調査で竪穴式石室の被覆粘土と解釈していた粘土層の一部が、第7次調査の結果、粘土槨であることが判明した。粘土槨は墳丘主軸よりわずかに南の位置で、竪穴式石室に平行するように構築されている。ただし、竪穴式石室よりも粘土槨の標高がやや高くなっている(図3)。また粘土槨の中央部では、槨内施設の腐朽ともなう被覆粘土層の落ち込みを確認できる。なお、粘土槨内部の調査をおこなっていないため、これが埋葬施設であるのか、埋納施設であるのかは判断できない。

粘土槨と石室の前後関係については、石室壁体の構築がほぼ終了した段階で粘土槨の構築が開始されていることがわかる。ただし、墓墳中心軸をはさんで両施設が位置していることから、当初より粘土槨を築造する計画であったことが窺える。また、粘土槨の下層粘土と石室の控え積みの上に砂質土と被覆粘土が敷かれていることから、築造開始時期が異なるにも関わらず、2つの施設への被覆はほぼ同時におこなわれたようである(図3)。そして両施設への被覆終了後、墓墳が埋められたと考えられる。(林)

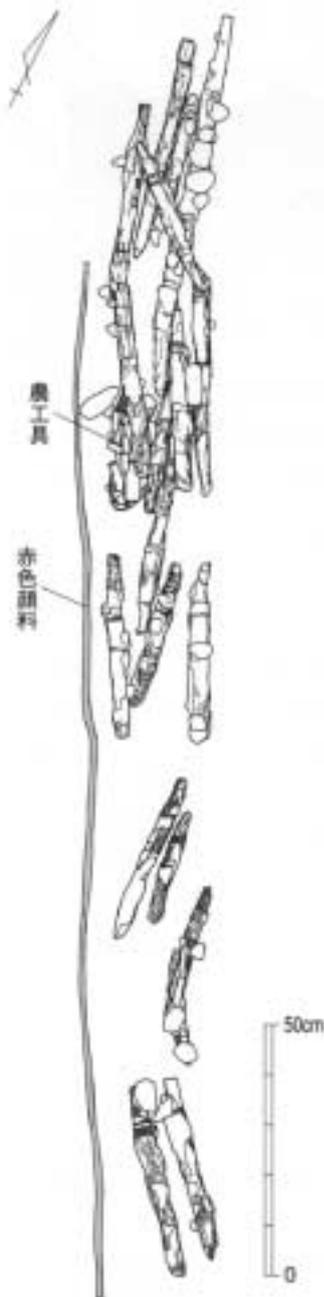


図4 鉄製品群平面図(S:1/15)

(6) 墓境内西部の鉄製品群

南北第2サブトレンチにおいて西壁際を精査していたところ、現地表から約10m下で数点の鉄製品が出土した。竪穴式石室から明らかにはずれたこの地点から鉄製品の出土をみたことは、まったく予想していなかった事態であった。そのため、急遽調査方針を再検討し、範囲確認をおこなうことにした。最終的に、墓墳西壁の上端から2.3m東、墳丘主軸から南北とも1.25mのほぼ長方形の区画に広がる長さ2.5m、幅0.25mの鉄製品群を検出した(図2)。

鉄製品群は上面に連なる刀剣と、その下面の農工具および石製模造品で構成される(図4)。

上面 上面の刀剣は、刀15点・剣5点で、すべて切先を南に向け刃を寝かせた状態で出土した。刀1点以外は、鞘や柄の木質が非常に良好に遺存している。上面の高低差は6cm以内におさまり、ほとんど水平といえるが、一部の刀は明らかにほかの刀剣の上に置いてある。

配置の仕方は、切先の位置などからだいたい7群に分けることができそうである。各群は2～4点で構成される。微妙に角度を変えながらジグザグ気味に直列している。刀のみの群と刀剣双方を含む群とがある。

下面 下面の農工具および石製模造品は上面のように広がっていない(裏表紙)。長さ30cm、幅12cmほどの範囲に、鉄製農工具として鎌・斧・柄付斧・刀子・蕨手刀子、石製模造品として鎌が上下に集積して出土している。直接の証拠はないものの、おそらく箱か袋の中におさまられていたと推測している。

集積の状況を簡単に記すと、上から順に、刀子・斧、柄付斧・鎌など、刀子・斧・鎌形石製模造品といった、おおよそ3面で構成されている。出土遺物の項で後述するように、いずれも小型品であり、最上面から最下面までの高低差は数cmにすぎない。

赤色顔料 鉄製品群の西に接して赤色顔料が線状に分布していた。鉄製品群の性格と密接に関わると予測されるが、赤色顔料の範囲を確認するような調査は今回おこなわなかった。(魚津)

2. 後円部墳丘の調査 第7次

(1) 17トレンチ(拡張区)

第6次調査の際に17トレンチ北端で検出した石列の性格を解明するため、第7次調査では拡張区を設定して調査した。その結果、拡張区のほぼ全面にわたって葺石を検出することができた。従って、この石列は後円部3段目斜面葺石の端部を示すものであったことが判明した。

葺石の残存状況は非常に良好で、ほぼ当時の状況のままと考えられる。葺石は長軸20cm前後の角礫であり、長軸方向を墳丘に差し込むようにして、下から上へ、また北から南へと順に葺かれている。葺石の範囲

は埴輪列の手前でほぼ直線的に停止しており、南北埴輪列の間にはまったく葺石が検出されなかったことから、埴輪列間には葺石が意図的に葺かれなかったものと考えられる（図5）。

この拡張区では後円部と前方部の接点が見つかりと予想していたが、調査の結果、確認することができなかった。この事実と18トレンチで得られた知見から、後円部と前方部の接点は17トレンチよりも下、後円部3段目の中間あたりに存在するものと考えられる。



図5 17トレンチ葺石と埴輪列（西から）

（2）13トレンチ

13トレンチは後円部北側斜面に位置し、幅25m、長さ310mをはかる。後円部における墳丘規模と構造、ならびに外部施設の状況を確認するために設定したトレンチである（図6）。

3段目斜面 葺石を検出している。後円部頂近くでは拳大の葺石が比較的多くみられたが、原位置を保っているものは少ない。斜面の傾斜角度は後世の改変により正確に把握できないが、葺石残存部分で計測した結果、傾斜は一定ではなく、大きいところでは13度の差を確認した。傾斜が急になっている部分と、墳丘盛土の単位に急激な変化がみられる部分が若干重なっている点は重要である。

葺石の基底石付近の残存状況は良好である。基底石は長軸50cmほどの角礫で、それぞれの長軸が墳丘ラインに沿うように据えられており、レベルは標高280mと一定している。基底石付近では裏込め石の充填を確認している。トレンチ西端の基底石から50cmほど後円部頂よりに大型の角礫が据えられているが、これは裏込め石の充填範囲を示す役割をもっていた可能性も考えられる。

2段目平坦面 約5.2mの幅で検出した。前方部での平坦面の幅（7トレンチで20m以上）よりも広いことを確認しており、墳丘形態復元の際に注意を要する。埴輪列は旧墳丘面の攪乱により遺存していなかった。

2段目斜面 一部で葺石を検出した。拳大の角礫が墳丘中心に向かって差し込むように葺かれている。標高246m付近でやや大きめの角礫を数個検出しているが、周囲が著しく削られていることから、確実に基底石であるとは断定できない（図7）。墳丘構造に関しては、砂礫層の地山を削り出して整形し、その上にさらに盛土を施している様子を、トレンチ東壁に沿って設けた断ち割りの壁面で観察できる。地山整形の際に削られた旧表土は、3段目斜面の途中まで墳丘盛土として使用されている。

1段目平坦面 2段目斜面の基底石が不明確であり、また1段目斜面に

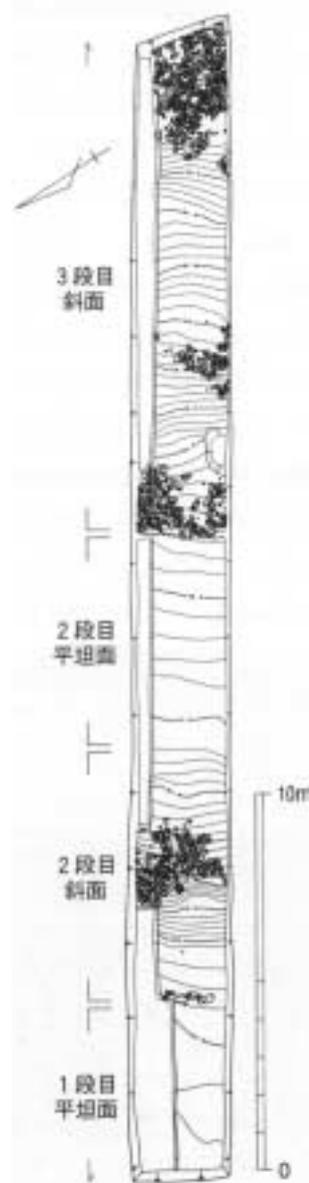


図6 13トレンチ平面図 (S:1/200)



図7 13トレンチ葺石検出状況(北から)

つながる傾斜変換点が確認できなかったことから、その幅を正確に把握できなかった。今回の調査結果からは、現状ではおよそ45m以上の幅をもつと推測され、やはり前方部で確認された平坦面の幅よりも広い。埴輪列はここでも遺存していなかった。

出土遺物 円筒埴輪や蓋形埴輪の破片、また少量ではあるが家形埴輪片と思われるものが確認されている。3段目斜面からの出土が多く、後円部頂から転落してきたものと思われる。(遠山・中川)

3. くびれ部の調査 第7次

(1) 11トレンチ(拡張区)

後円部1段目平坦面と埴輪列の検出を目的として、第4次調査に際してくびれ部に設定した11トレンチを墳丘側へ拡張した。また、第4次調査で検出した埴輪を取り上げるとともに、調査を保留していた「半裁埴輪遺構」と「集石遺構」の再調査をおこなった。

葺石と埴輪列 トレンチ南西部で1段目斜面を検出した。葺石は転落などで大半が失われていたが、長軸15cm前後の円礫を用いていることを確認した。北東部で検出した2段目斜面では、長軸30cm程度の基底石を長軸が墳丘ラインに沿うように据え、その上に長軸15cm前後の石を小口積み状に葺いている。1段目平坦面の幅は約45mである。トレンチの南壁際と北壁際で、2個体の原位置を保った円筒埴輪を検出した。第4次調査で検出した埴輪と合わせて5個体となる。埴輪列は平坦面のほぼ中央に位置する。前方部の埴輪列を構成する埴輪は確認できなかった。埴輪の間隔は前方部側から10m、12m、18m、15mと一定しない。埴輪はいずれも第1条突帯より上は残存せず、底部のみの出土である。底部径は約30cmをはかる。埴輪ごとに直径40cm前後の平面円形の土坑を掘り、置き土を施した上、その中央に据えている。

埴輪棺 「半裁埴輪遺構」と「集石遺構」は埴輪棺であることが判明した。「半裁埴輪遺構」は埴輪列よりも墳丘側に位置し、後円部墳丘ラインに長軸に沿う大小2基の埴輪棺1・2である(図9)。埴輪棺1は検出面で長径1.35m、短径0.8mの楕円形を呈する墓壇に4条突帯5段の円筒埴輪を置いている。墓壇は棺を設置するための掘り込みをもつ2段構造である。棺を安定させるためか、北側に棺に沿って石を置く。東側の小口は石で塞いでいるが、西側は攪乱のため確認できなかった。破碎した円筒埴輪の口縁



図8 11トレンチ土師器皿集積遺構(東から)

部を胴部(第3段)の2個の透し孔を塞ぐように置いている。埴輪棺2は縦に半裁した円筒埴輪を外面上向きに重ねて遺骸を覆う構造である。墓壇は長径0.8m、短径0.4mをはかる。「集石遺構」は埴輪列よりも周壕側に位置し、後円部墳丘ラインに長軸が直交する。集石の下から埴輪棺1・2と様相を異にする埴輪棺3を検出した(図10)。墓壇は長径1.6m、短径0.55m、深さ0.25mの隅丸長方形である。南側では突帯を墓壇の長軸に直交させた埴輪片を、遺骸を覆うように南



図9 11トレンチ埴輪棺1・2（北から）



図10 11トレンチ埴輪棺3（東から）

から重ね置く。中央付近では長さ50cmほどの半裁した円筒埴輪片を外面上向きに2枚重ね置き、その隙間を埋めるように小さい埴輪片を重ね置く。北側では墓壇の長軸に突帯が平行するように埴輪片を置く。小口部分では内面を内側に向けた埴輪片を、小口を塞ぐように立てて置く。これらの埴輪片を覆い隠すように、上に長軸30cmほどの石を並べ置く。この集石部は1段目平坦面上に露出していた可能性も考えられる。

土師器皿集積遺構 トレンチ北西部の直径30cm、深さ10cmの掘り込みから、中世の土師器皿8点が4点ずつ重ね置かれた状態で出土した（図8）。第6次調査の際、隣接する15トレンチでも同様の土師器皿が集中して出土している。これらは近接した時期に廃棄もしくは埋納されたと考えられる。（橋本・大野）

（2）18トレンチ（拡張区）

南側くびれ部の3段目斜面と2段目平坦面の状況を明らかにするため、第6次調査で設定した18トレンチの南半を西側に拡張した。拡張区は南北約4.3m、東西約2.0mをはかる（図11）。

3段目斜面 葺石が良好に遺存しており、後円部の基底石と前方部の基底石が接する状況を明瞭に確認できた。基底石には長軸45cmほどの石を用い、おおむね長軸が墳丘ラインに沿うように並べている。後円部では長軸25～40cmを主体とする石を葺き、その隙間にやや小さめの石を詰めているのに対し、前方部では長軸15～25cmを主体とする石を使用している。後円部と前方部の接続部では、後円部の葺石を覆うように前方部の葺石を葺いている状況を確認できることから、前者を葺いた後に後者を葺いたと考えられる。また、前方部の接続部付近では、後円部と同様に長軸25～30cmほどの石を葺いた区画が認められるが、その性格は明らかでない。

2段目平坦面 標高28.1m前後である。トレンチの範囲内では埴輪列は認められなかった。

出土遺物 埴輪と中近世の陶磁器が出土した。埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪がある。原位置を保って出土したものはなく、いずれも墳頂から転落したものと考えられる。前方部3段目斜面上に堆積した墳丘流土中から朝顔形埴輪がまとまって出土したほかは、ほとんどが小片である。（橋本・北口）



図11 18トレンチ拡張区全景（南から）



図12 後円部頂埴輪列検出状況(南東から)



図13 形象埴輪(13トレンチ出土)

4. 出土遺物

(1) 埴輪

第7次調査では円筒埴輪と朝顔形埴輪、形象埴輪が出土している。

円筒埴輪は後円部頂(図12)、17トレンチ、11トレンチでまとまった資料を得ている。円筒埴輪は薄手で赤褐色を呈するものと、厚手で淡褐色を呈するものに大別でき、後円部頂やそれに続くスロープでは前者が主体を占めていた。1段目平坦面では後者が主にみられ、使用する埴輪に差異が認められる。13トレンチでは円筒埴輪の底部と家形埴輪などの形象埴輪(図13)が出土している。家形埴輪には貼り付けで柱を表現した壁の部分などがあるほか、屋根部と考えられる破片も出土している。これらは3段目斜面上部を中心に出土しており、後円部頂が削平された際に転落したものと考えられる。(東方)

(2) 鉄製品

鉄製品は第6次調査の際に盗掘坑から、第7次調査の際に南北第2サブトレンチから出土している。盗掘坑出土品には鉋やりがんな、小札状品、針状品などがあるが、いずれも小片であり詳細は明らかでない。南北第2サブトレンチでは、刀15点、剣5点、鎌1点、有袋斧4点、柄付斧2点、刀子9点以上、蕨手刀子5点が出土している。

刀は抜き身と考えられる1点(図14-1)をのぞいては、おおむね木質が良好に残存している。柄縁・鞘口に漆を塗り、直弧文を刻むもの(図14-2・3)を確認している。鞘木は2枚合わせであり、刀身は平造りである。剣も木質がよく残り、柄縁・鞘口に漆を塗るが、文様を刻むものはない(図14-4)。刀と同じく、鞘木は2枚合わせで刀身は平造りである。茎は柄木に差し込んでいる。

鎌は通有の直刃鎌である(図14-5)。有袋斧はいずれも小型で、袋部断面が方形で無肩のもの(図14-6・8)と袋部断面が円形でわずかに肩のあるもの(図14-7)とがある。柄付斧はどちらも小型品で、柄をねじってある。横斧(これまで「柄付手斧ちような」と呼称されてきたもの:図14-10)と縦斧(図14-9)とがある点は注目される。刀子(図14-14~16)は完形品7点を含む。蕨手刀子は、柄が直線的なもの(図14-11・13)と背側に反るもの(図14-12)がある。(橋本)

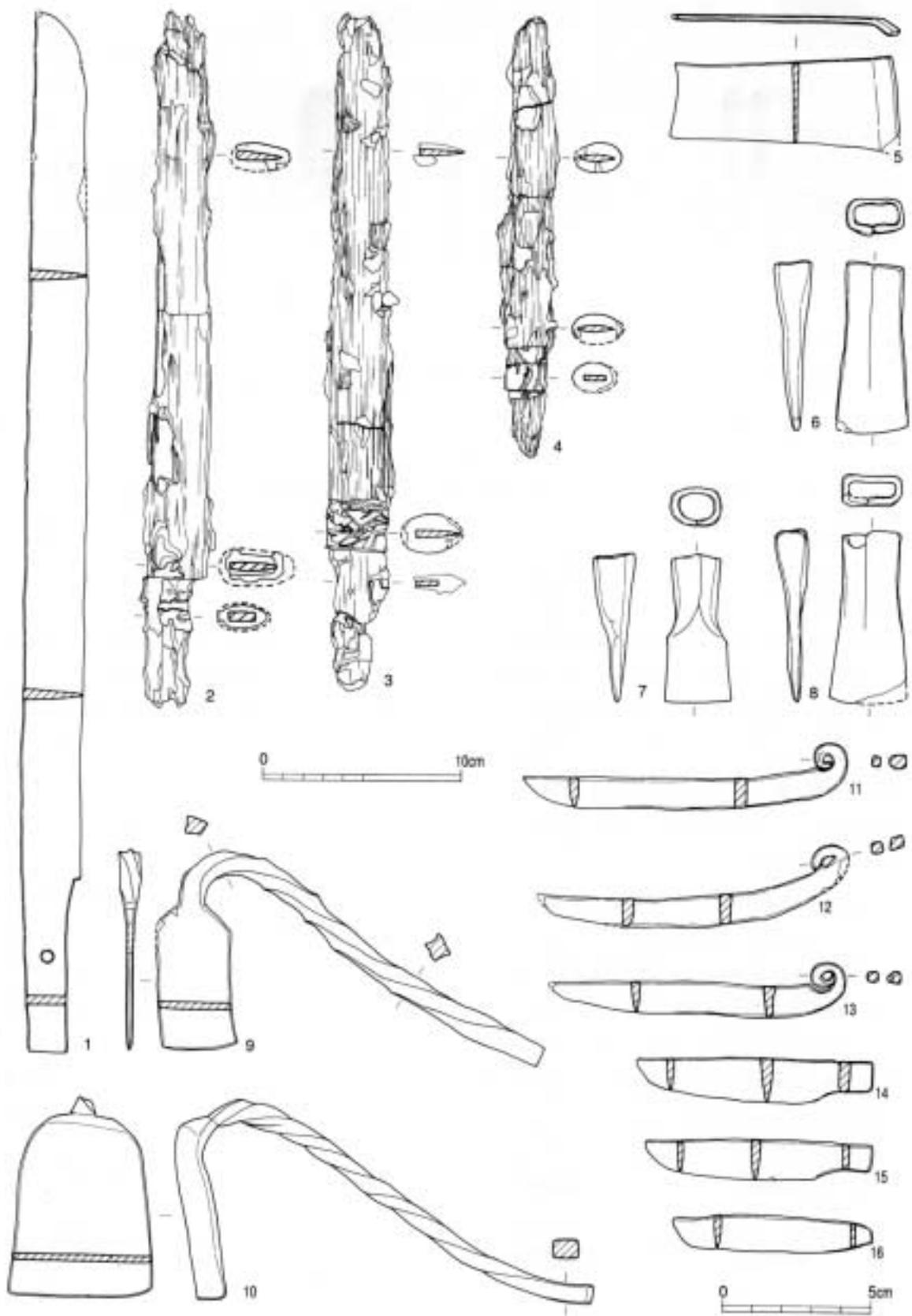


图14 鉄製品実測図 (1~4S:1/3, 5~16S:1/2)
 1~3刀, 4剣, 5鎌, 6~8斧, 9柄付縦斧, 10柄付横斧, 11~13蕨手刀子, 14~16刀子

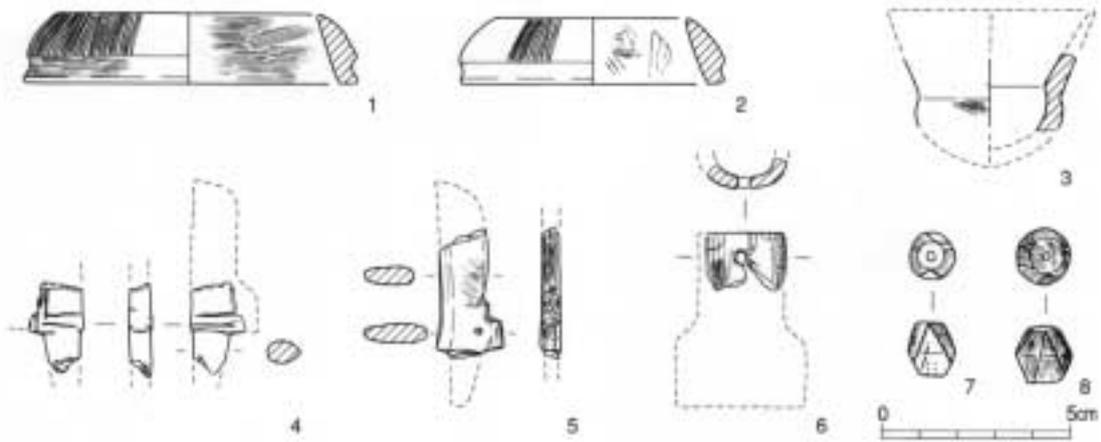


図15 石製品・玉類実測図 (S:1/2)

1・2 滑石製石釧, 3 埴形石製模造品, 4・5 刀子形石製模造品, 6 斧形石製模造品, 7・8 棗玉

(3) 石製品・玉類

第7次調査で出土した石製品の多くは、石室南側壁東小口よりの盗掘坑の埋土から検出したものである。この出土状況から判断すると、これらは石室内からもちだされた副葬品の一部であると考えられる。

石製品はほとんどが小破片で、原形をとどめていないものが多いが、器種が特定できるものもわずかにある。それらの内訳は、滑石製石釧(図15-1・2)が3点、緑色凝灰岩製石釧が1点あり、石製模造品としては埴が1点(図15-3)、刀子(図15-4・5)が8点、斧(図15-6)が2点である。また、これらの盗掘坑埋土からの出土遺物のほか、墓壇内西部の鉄製品群において、鉄製農工具に伴って鎌形石製模造品が1点出土した。滑石製品は比較的小型のものが多く、形態や石材が多様であるのが特徴である。

このほか、盗掘坑埋土の中からは2000点以上に及ぶ玉類が検出された。その8割は滑石製の白玉であるが、ほかにも勾玉や管玉、算盤玉、棗玉、ガラス玉が出土している。特徴的なものとしては大型の濃紺色のガラス玉や、線刻が施された大型棗玉(図15-7・8)があげられる。また、玉類の多くには赤色顔料の付着が認められ、滑石製品同様、石室内の副葬品の一部であったと考えられる。(林)

(4) 中世以降の土器

11トレンチ拡張区から出土した土師器皿(図16)は、口径9.1cm、器高2.0cm、厚さ0.5cm前後に集中している。色調はにぶい黄橙色を呈する。手づくねで成形されており、口縁部外面に2段にわけてナデ調整が施されている。内面にもナデが施され、最後はナデ上げられているものや底部不調整のものもみられる。これらの法量や製作技法から、第6次調査の際に15トレンチから出土した土師器皿と同様に、12世紀後葉から13世紀初頭のものであると考えられる。後円部頂の北東部で検出した掘り込みからも、口縁部外面を2段に横ナデした、12世紀後葉から13世紀初頭のもものとみられる土師器皿が出土している。また、石室南側壁中央付近の盗掘坑から窯道具の匣鉢が出土したが、時期は不明である。(大野)

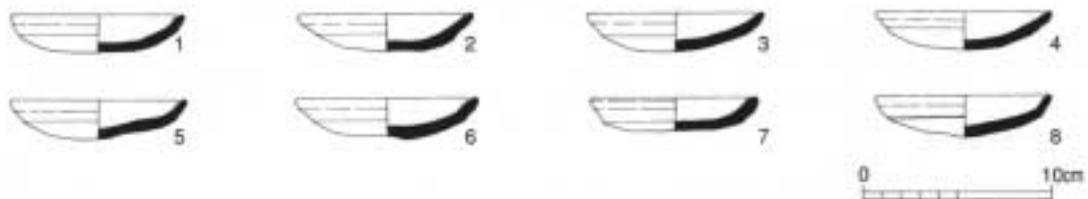


図16 中世土師器皿実測図 (S:1/4)

墳丘・周壕形態の復元

第6次調査の概報においても墳丘形態の復元をおこなっているが、第7次調査で新たに確認できた成果をも加味した墳丘形態の復元と、これまでにあった地中レーダ探査とボーリング調査の成果を踏まえた周壕形態の復元をおこなう(図17)。

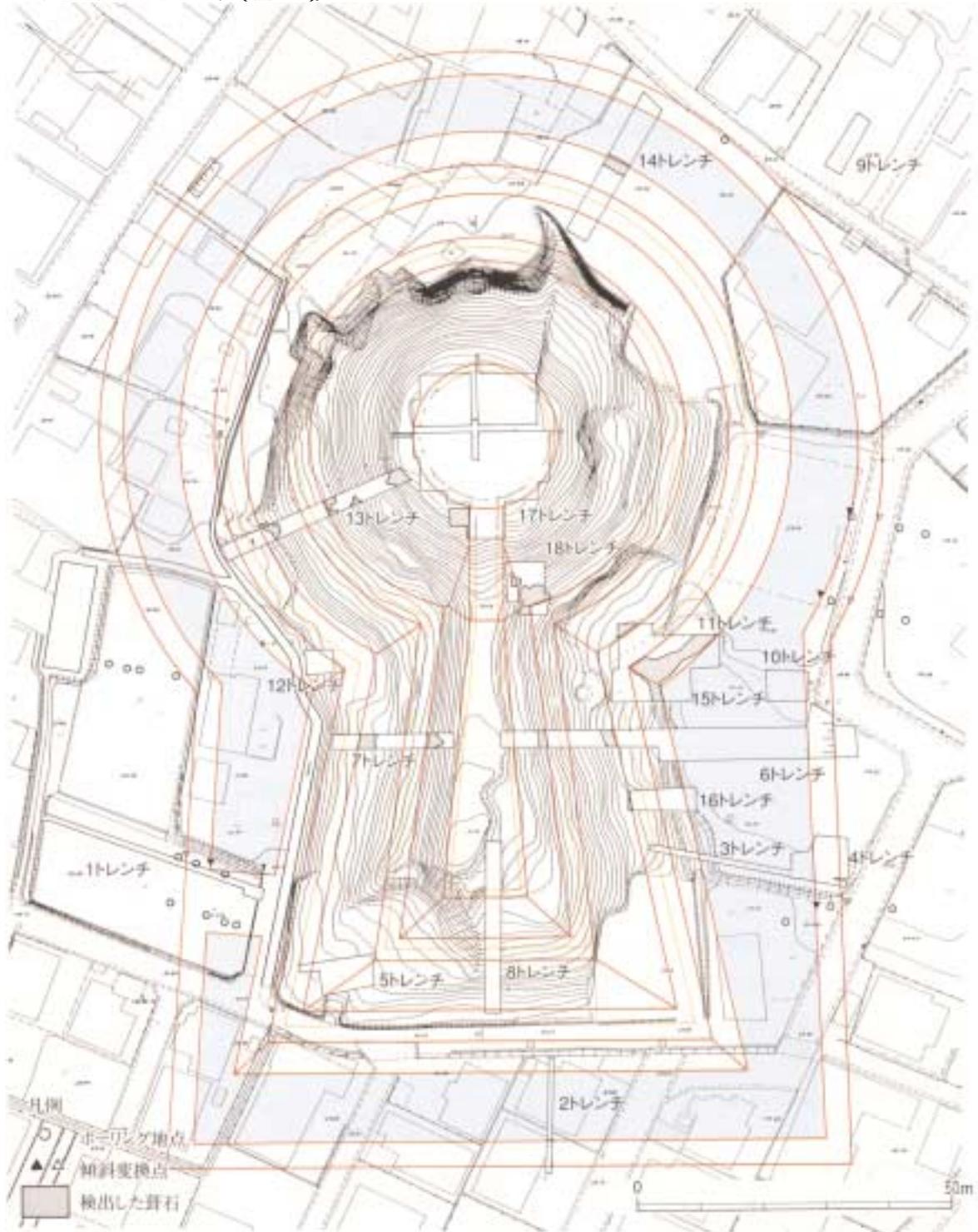


図17 墳丘・周壕形態の復元案 (S: 1/1000)

墳丘形態の復元 1 段目については、第 6 次調査の概報における復元案を大きく修正する情報は新たに得られていないため、この復元案をそのまま踏襲する。墳丘長約 150 m、後円部径約 96 m、くびれ部幅約 55 m、前方部前端幅約 82 m となる。後円部 2 段目は 11 トレンチ拡張区で 2 段目斜面葺石の基底石が検出され、直径約 77 m に復元できる。ただし、13 トレンチで検出された 2 段目斜面基底石はこの円弧からはずれるため、2 段目に関しては円の中心がずれる可能性があるが、13 トレンチの基底石が攪乱されて動いている可能性もある。後円部 3 段目は 13 トレンチで 3 段目斜面基底石が検出され、第 6 次調査における 18 トレンチの成果と合わせて直径約 55 m に復元できる。前方部に関しては、18 トレンチ拡張区で 3 段目斜面基底石が検出されており、これを主軸で折り返すとくびれ部の 3 段目の幅は約 14 m となる。6 トレンチで検出されている前方部 3 段目斜面基底のラインと結びと、1・2 段目とその開きが異なり、主軸に対して約 4 度となる。このことから、1・2 段目と 3 段目は相似形にならないとみられる。前方部前端の幅は 2 段目が 59 m、3 段目が 27 m 程度であったと復元できる。平坦面の幅は前方部と後円部ともに、1 段目で 45 m、2 段目で 35 m 程度に復元できる。また、17 トレンチで検出された葺石から、前方部頂と後円部頂を結ぶスロープは幅 5 m 程度であったと復元できる。長さは不明だが、斜距離で 20 m 以上あったと考えられる。18 トレンチで確認された葺石の状況と 17 トレンチでの状況から、スロープは途中までは後円部斜面と同一面であったとみられる。墳丘の北と南で各斜面基底石のレベルを比較してみると、すべての平坦面で北側が 30 cm 程度高くなっている。これは北東から南西に緩やかに傾いている原地形に影響されているためであろう。各斜面基底石のレベルから、各平坦面は同一の面を形成していると復元できるが、3 段目基底石では 6 トレンチより 18 トレンチが約 40 cm 高くなっている。ほかの段と同様に前方部前端に向かって緩やかに上がっていくよう復元すると、2 段目については前方部と後円部で平坦面が連続していなかった可能性がある。1 段目斜面基底からの比高は後円部頂で約 13 m、前方部頂で復元して約 9.5 m をはかる。

周壕形態の復元 発掘調査で周壕の立ち上がりあるいは肩が検出されたのは 4・6 トレンチのみであるが、周壕は地山を削り出して成形していることが確認されている。従って、ボーリング調査の試料から得られた地山のレベルをもとに傾斜変換点を推定し、周壕の形態を復元することが可能となる。まず、後円部側の調査で得られた試料から想定される傾斜変換点を通る円弧を引くと、ほぼ墳丘と同心円となる。また、前方部の南側については、6 トレンチで確認された周壕の肩とボーリング調査から想定される傾斜変換点を結びと 10 トレンチ東側で後円部側の円弧とぶつかるため、周壕の外形は前方後円形に復元できる。周壕は前方部前端に向かって幅を減じている。以上、墳丘南側については発掘調査で確認された成果と矛盾することなく周壕の形態を復元できた。西側では、2 トレンチで確認された地山の傾斜変換点が周壕の立ち上がりにあたるとみられるが、それより上部は削平されてしまっている。北側に関しては調査地点の地山のレベルが高いため、ボーリング調査では明確な傾斜変換点を捉えられず、周壕を復元することが困難であった。地中レーダ探査では、南側の周壕形態を主軸で折り返した位置に傾斜変換線を捉えられず、幅が狭かったとみられる。また、地山のレベルと探査の結果を合わせることにより、前方部北側の前端よりに陸橋状の施設が付設されていた可能性が指摘された。この施設は基底で長さ、幅ともに約 10 m の規模に復元できる。このほかに周壕形態を復元できる情報として、民家の建替工事に伴う立会調査によって、後円部北側に周壕の落ち込みが確認されていることがあげられる。これらから周壕の規模を復元すると、幅は基底で後円部側 9 m 程度、くびれ部付近で 23 m 程度、前方部前端で 11 m 程度をはかり、全体としては前方後円形を呈するが、墳丘と相似形ではなく、また左右非対称である可能性が高い。(東方)

第7次調査までの総括

今回の第7次調査をもって昼飯大塚古墳の範囲確認調査をひとまず終了することとなった。昭和55年度にはじめて測量をおこない、周壕などにトレンチを設定した第1次調査から20年を経ている。当時墳丘長137mと報告され、岐阜県最大の前方後円墳との評価がなされた後はしばらくの空白があったが、整備構想に始まる平成5年度の再測量、平成6年度の第2次調査以後は毎年多くの成果を蓄積してきた。ここで長年の調査成果を要約しきれものではないが、今後刊行予定の正報告書までの橋渡しをしておきたい。

墳丘形態と規模の確定は国史跡とする上でも重要な調査課題であった。周辺の宅地化や墳丘の改変はトレンチ設定などに影響を及ぼしたが、物理探査やボーリング調査を併用した方法を駆使し、第6次調査までに墳丘長約150m、後円部径約96m、くびれ部幅約55m、前方部幅約82mという数値を得るにいたった。これから復元できる墳丘形態は大和北部に造営された古墳群のものに近似し、前方部3段、後円部3段という段築成からみても、昼飯大塚古墳が畿内特定勢力との密接な関係を背景に築造されたことが窺える。

後円部頂では比較的良好な状態で遺構や遺物を確認した。径約20mで配置された外周埴輪列は前方部にまで続くことを確認し、その内側には方形区画や方形壇はみいだせなかったが、家・鞆・盾・蓋・甲冑形などの形象埴輪の存在を推定できた。また、後円部頂の特定の範囲から集中して滑石製の玉、小型の土師器、笄形土器や土製品が出土し、葬送儀礼に関する多くの情報を収集することができた。

墓壇内の竪穴式石室と粘土槨はほぼ同時に構築されたと判断している。石室は盗掘を受けていたが、盗掘坑埋土から玉類、刀子・斧・埴形などの石製模造品や緑色凝灰岩製・滑石製の石釧などが出土し、副葬品の一端を把握することができた。墓壇内西部では刀剣と柄付斧などの農具からなる鉄製品群が、石室と粘土槨を被覆する程度まで墓壇が埋め戻された段階で、それらの主軸に直交する方向で配置されていた。これが第3の埋葬に伴うものか、あるいはほかの解釈をすべきものかは今後の調査課題である。

築造時期については、円筒埴輪や形象埴輪、滑石製玉類、土師器、石製模造品などの特徴をもって、周辺の古墳との比較では矢道長塚古墳よりも後、遊塚古墳よりは前と考えるのが妥当である。実年代におきかえると4世紀後葉としておきたいが、この時期に限れば昼飯大塚古墳は東海地方最大規模となる。被葬者の具像はみえないにしても、畿内特定勢力との連携のもと造墓と様々な儀礼を受容した勢力層は、不破を拠点とし4世紀代を通して濃尾平野の広い範囲にわたって政治的な覇権を握っていたものと考えられる。(中井)

報告書抄録

ふりがな	ひるいおつがこふん6 はんいかくになちようさがいよう へいせい11ねんど							
書名	昼飯大塚古墳 範囲確認調査概要		平成11年度					
シリーズ名	大垣市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編者名	阪口英毅 中井正幸ほか							
編集機関	大垣市教育委員会							
所在地	〒503-0911 岐阜県大垣市室本町5-51 TEL.(0584)82-2300							
発行年月日	西暦2000年8月1日							
所収遺跡名	所在地	所在地		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひるいおつがこふん6 昼飯大塚古墳	岐阜県 大垣市 昼飯町 大字大塚	21202	48	35度 23分 03秒	136度 34分 30秒	1999年 8月2日 } 1999年 11月15日	500㎡	環境整備事業
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
昼飯大塚古墳	古墳	古墳時代	墓壇・石室・粘土槨・鉄製品群・埴輪列・墓石		埴輪・土器・鉄製品・石製品		3段築成 墳丘長約150m 同一墓壇に2種の埋葬施設	

大垣市文化財調査報告書 第37集

昼飯大塚古墳

範囲確認調査概要 平成11年度

2000年8月1日発行

編集・発行 大垣市教育委員会

印刷 榎谷印刷株式会社

〒503-0936

岐阜県大垣市内原2-177

TEL.0584-89-9511

